スポーツ少年育成課題について

森田　将宏　（生涯スポーツ学科　地域スポーツコース）
指導教員　金森　雅夫

キーワード：ゴールンエイジ，スポーツ少年団，AASC

1，緒言

私は，大学でスポーツ学を専攻しており，授業でドイツはスポーツ先進国だということを学んだ. スポーツ政策としても取り入れている箇所があるほどだ.

ミニバスケットボールクラブに所属していた私は，スポーツ少年の育成にも興味がある. スポーツ少年の時期は青少年やアスリートの軸にもなりえる運動機能や運動神経を発達させる大事な期間でもある. その発達にはその期間に様々な運動経験が必要であり，これは「ゴールデン・エイジ」と呼ばれている.

スポーツ少年団について調べていくうちにスポーツ少年団の理念や出来た背景などが出てきた. 国のスポーツ政策が多いに絡んでいることであった. 日本では運動機能を伸ばす時期にスポーツ少年団に入るとそのスポーツだけしか出来ない. 海外の取り組みと日本で行う取り組みを国の政策から割り出す事によってスポーツ少年の育成に必要な政策はそういったものか見ていき，結果・考察をまとめることによって今後の日本の少年スポーツの在り方について示す.

地域総合型スポーツクラブも私は大学の授業によって知る事が出来たが, まだまだ地域によっては設立されていないとこも多く, 普及されていない.

2，研究方法

今回の研究対象は日本に限り, スポーツ少年団を対象とする. 外国は主に力を入れているスポーツ少年育成政策のものを取り上げる.
対象は, オーストラリアとドイツのスポーツ少年育成政策を中心とする.

方法として主にドイツ・オーストラリア・日本のスポーツ少年に対しての政策に関するホームページや文献を参考とし, 政策等を挙げていく. そして，それらに関する項目をまとめていく.

3，結果と考察

ドイツは小学校を自由参加型終日制にし, 午後の多様な教育プログラムをさまざまな学外組織との連携・協力に基づいて展開し，スポーツは最も頻繁に提供されているプログラムの 1 つである．スポーツと密接な環境をつくってきている. 一方のオーストラリアというと小学校の放課後に専門のトレーナーのもと，スポーツ活動や運動に無料で参加できる AASC というプログラムを取り入れてきていた．実施機関も多く，スポーツに触れる機会のある子供が多い．ところで，日本はというとスポーツ少年団こそあるものの二か国に比べ, 少し入りづらいようなものになっていないか不安点が残る．そこで，日本にも先ほどあげた二カ国のようなスポーツに対して参加する気軽さが求められてくるのではないかと考えた. もとより外国に引けをとらないためには, そうすべきであるとも捉えられる.

4，まとめ

学校・団体間の繋がりを強めて，最終的には地域総合型スポーツクラブのような多種目型スポーツクラブが目立つようになって欲しい. これからもスポーツクラブは地域にあるもので共に成長していく場所である.

5，引用・参考文献

杉山茂（2011）『スポーツは誰のためのものか』慶応義塾大学出版会 pp257-258

スポーツ少年団
http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/club/data/pdf/shonen_e7.pdf